

●●暮らしの広場●●

がん 克服へ [31] 工藤 明敏

■大腸がん編

早期大腸がん(がんの浸潤が粘膜下層までの浅いがん)のうちに見つけて治療すれば治りやすいのですが、大部分は無症状です。

進行大腸がんの症状は、がんのできた場所によって異なります。



大腸の 始まりの あたりは 腸の内腔が広が

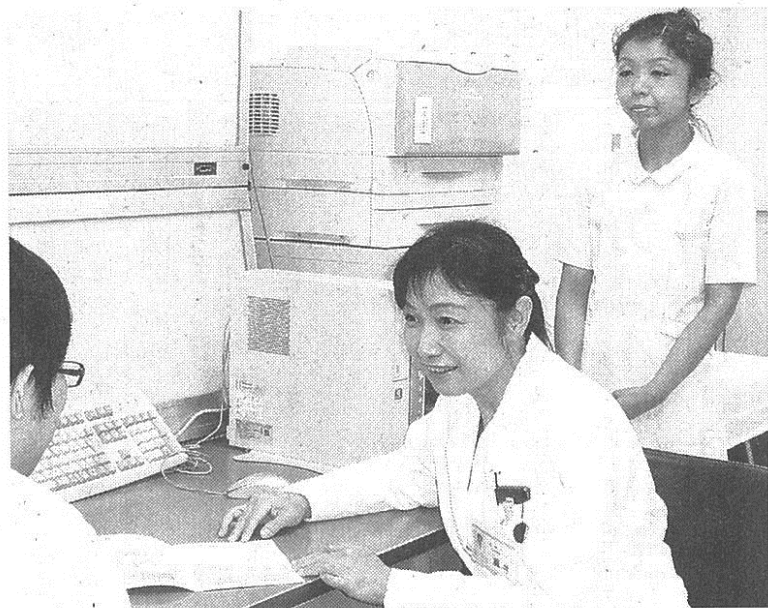
症状

早期は「無症状」

特に直腸がんは、便が細くなったり、排便後も便意が残ることもあります。通常は直腸に便がたまって便意をもよおしますが、直腸がんの場合便がなくてもがんがあるため、常に便意をもよおすので

め、がんができて通過障害は起こり難く、またがんから出血しても見た目に血便となることは少ないため、進行がんで見つけることが多くなります。腹痛やしこりを触れるなどの症状で発見されます。貧血で倒れて大腸がんを診断されることもあります。それに対し、直腸に近い部位は便がだんだん固くなるため、がんができて腸の内腔が狭くなると、通過障害が起きやすくなり腸閉塞となります。また、出血すると便に血が付着しやすいので、血便として気付くことが多くなります。

大腸がんは症状がなく、肝臓や肺への転移が先に見つかった後に見つかることもあります。早期発見には、症状がなくても便潜血検査を受ける必要があります。



便潜血結果を説明する藤井総合健診センター一長(中央)、森田看護師(右)

これは便中の見えない微量の血液を調べる検査で、便に棒をこすりつけるだけです。食事制限は必要ありません。検便には異なった日に採便する2日法が勧められています。

2回のうち1回でも「便潜血陽性」となったら、まず検査を受けてください。陽性となる病気には、大腸がん以外に痔、潰瘍性大腸炎、大腸憩室症、ポリープ、胃潰瘍や十二指腸潰瘍、さらには鼻血を飲み込んで陽性となります。

逆に陰性なら大腸がんではない、ということはありません。実は大腸進行がんの20%が、前年受診で陰性というデータもあるくらいです。大切なことは、肛門出血を自分の判断で「痔だろう」と思い込まないことです。検査を行って初めてがんかどうか分かります。毎年検診を受けるとともに、腹部症状があれば検診を待たずに、医療機関を受診されることをお勧めします。(阿知須公立病院診療部長、外科部長)

11月2日火曜日に掲載